

Title	故阿部教授略歴及び其著作年表
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.1 (1925. 2) ,p.147- 153
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 故阿部教授略歴及び其著作年表

慶應義塾大學經濟學部及文學部教授にして本會

同人なりし阿部秀助氏は本月三日五十歳を以て逝去された。我等一同は深く哀悼の情に堪へない。

教授は明治九年七月福岡に生れ、郷里の小學を終了後、山口中學、山口高等學校を経て東京帝國大學文學部史學科に入り、三十六年七月同科を卒業せられた。

教授は大學卒業後直ちに明治義會中學の教職に就かれ、歴史及地理を擔當せられ、次で三十七年には讀賣新聞に入社せられ、三十八年四月より法政大學に教鞭を執られた。同年初夏には山口高等學校在學中よりの知已、河上肇博士のセリグマンの譯「新史觀」に序文を寄せられた。教授の歴史

觀を窺ひ得るを以て次に其の一節を掲ぐ。

若、史家のなす處にして只過去に於ける富贍なる事象の排列に止り、毫も其過去及び未來に對する理會ながらんか、是れ一個の記錄局吏たるに過ぎず、史は斯の如くして長に幼稚の時代を脱することなるべし、思ふに現代の歴史研究は人文史、經濟史、法制史等の方面を離れて其が立脚地を求むること能はず且つや一個人によりて完全なる國史を著すの容易ならざるは「藝術は長く人生は短し」の語之を證して餘りあり、我は只自己の歴史觀を理想として以て之に近かんことを求むるのみ。

當時日露戰役中なりしを以て、教授も召集せられ、同年八月、一輸卒として出征し、翌年二月無事凱旋の上再び法政大學の教職に就かれた。此の戰役に於て、得難い體験を得られたとは後年教授の我々に屢々語られしところである。

四十年四月より本塾大學部豫科及び普通部に教

鞭を執られ、豫科に於ては地理、歴史、普通部に於ては地理を擔當せられた。

教授は地理學の良書に乏しきを慨し、四十年には綜合經濟地理、四十一年には日本地理講義上卷四十三年には同下卷を公にせられた。學界の注目を惹きしことは言を俟たない。

上卷は普遍的方面を、下卷は特殊的方面を取扱ひしものにして最も特色があり、今尙ほ其の聲價を失はない。同年（四十三年）七月には選ばれて義塾留學生となり、主として獨逸に遊び史學經濟史等を專攻せられた。

教授はシベリア鐵道により途中ペテルブルグに一二日滯在の上伯林にゆかれた。在伯當初は教授の研究主題たる「企業の見地より觀たる中世史及近世史」と二三理論方面に關する研究材料を蒐集するため、日々柏林の王立圖書館及柏林大學附屬圖書館に通はれ、次で同月柏林大學に入學せられ

た。其の入學宣誓式は極めて嚴肅にてシユミツト總長自から握手せられし時、教授は學問上に對する自己の信念を著しく高められたとのことである。同大學にてはシユモラー教授につき、柏林高等商業學校にてゾムバルト教授の經濟史を聽講し、兩教授の學說に對しては少からざる疑問と史的友證とを抱かれたそうである。

われらは教授の柏林近信（明治四十三年十二月發行、三田學會雜誌所載）を讀む毎に肅然として襟を正さざるを得ない。次に其の一節を掲ぐ。

日本の如き新進の學術國に於て必要なるものは、戰場の功名者にあらずして寧ろ戰場の犠牲者に有之候。不肖生が如きもの既に日露の戰役に於て死すべき身なり。餘命を今日に全ふするは之れ天の賜なり。余は此の一事を回想する毎に感慨の念胸に充つるを覺ゆ希くは餘命のあらん限り日本に於ける着實なる史風の犠牲者となり後援者となりて研究に從事致度存候。

美しき事業の下には常に協力の精神存す。我徒四千の師弟心を一にして塾長を助け、日本の慶應義塾をして更に世界の慶應義塾たらしめざるべからずと存候。

遠く離れて祖國の現狀を觀察すれば實際の政策に於て將た思

想上の傾向に於て多く論ず可きもの有之候。只だ讀む可き書の

多くして月日の經過し易きこと眞に人生の一大恨事に有之候。

遙かに諸君の御健康を祈る。

言々悲痛、教授の面目躍如としてゐる。此の一文を讀めば、教授上に於ても將又職務上に於ても、ありし日の教授の獻身的行爲は該近信中に見ゆる精神の流露なりしことを知るであらう。

かくて教授は翌々年伊太利に赴き、専らベニス、フロレンス、ゼノア、アマルフィ等を實地調査し、和蘭、白耳義を經て英國に渡り、「ゴールドスマス、ライブラリー」にて英國に於ける近世資本主義の發展史を研究し、それより米國を經て同年七月歸朝せられた。

歸朝後教授は經濟學部に於て主として經濟學說研究、經濟史を、我が史學科に於て西洋史、地理學を、一昨年田中萃一郎博士の長逝後は史學研究法を擔當せられ今日に及んだ。而して其の熱誠なる講義と懇篤なる薰陶と高潔なる人格とはわれら

をして深く感銘せしめた。

教授はまた世界大戰勃發するや太陽、外交時報新時代等數多の雜誌に時事を批判し、世人を裨益するところ極めて多く、大正三年十一月には「獨逸對列強の抗爭」(時事叢書)を著はし、六年一月には「戰後の獨逸」(時事叢書)を公にせられた。後者は小冊子なりしとはいへ、時事叢書中最も傑出せしものにして、教授は戰後の獨逸が遂に戰前の狀態を繰り返すこと能はずとの前提のもとに、戰後の教育及び經濟に論及せられたものである。當時、大類伸博士は史學雜誌に紹介の勞を執られ且激賞せられた。

教授は大正七年頃法政大學を辭し、八年より國士館に教鞭を執られた。同年にはカブール(英傑傳叢書)を、十二年にはランケの名著「歐洲近世史」を邦譯せられて斯界に貢獻せしこと甚大であつた。教授は居常最もランケに私淑しその史觀は實に獨創

に富み、已を其の時勢に置き、總てに於て科學的、藝術的であつた。

教授は十二年春頃より現在の醫學では不治の病、白血球過多症に罹り、昨年春以來病勢おもはしからざりしも、病をおして再三教壇に立たれ

た。之がため病勢更に進み、五月以來休講し専ら療養に力められた。此の間教授は寸時も塾のことを忘れず、教壇に立つこと能はざるを何よりも恨事とせられた。塾生はこの日々に窶れゆく教授の姿を見て痛く同情し、過般一般有志學生は醵金して多額の見舞金を贈り、又經濟學部教授諸氏は經濟學說研究を氏に捧げ、其の收益を以て見舞金に充つる等何れも學界の美舉たることは勿論、這般の消息天下に報道され、世道人心を裨益する處頗る大であつた。

教授はまた病中研學に倦むことなく、和洋の新刊本は枕頭に堆高く積まれ、訪ふ者の研究心を大

いに鼓舞せられた。最近は支那哲學及び支那社會史に興味を有せられ、元代の貨幣制度を研究し度き口吻を漏された。教授はまた時事新報の講義錄において獨逸經濟學說、近世商業史を擔當執筆せられた。

昨年十二月末には嘗て邦譯せられしスペングラー著「普魯西亞主義と社會主義」を從來、三田學會雜誌其の他の雜誌に發表せられし諸論文と共に「社會主義に對する諸觀察」の表題の下に公にせられた。

今や人格、學才將に圓熟せられんとする時此の長逝に會ふ。われらの痛惜何物か之に若かん。あの溢るゝばかりの熱情と何ものとも魅せずしては止まぬあの偉大なる力とは、いつまでもわれらを感奮興起せしむるであらう。

教授は生前、歴史、地理、政治、外交、經濟、哲學、宗教等實に多方面に亘る論文を諸雜誌諸新

聞に寄せられた。よつて以て教授の學識が如何に該博なりしやを知るに足る。今教授の生前發表せられし歴史、地理に關する著作年表を左に掲ぐ。

經濟に關する著作年表は三田學會雜誌二月號所載高木壽一教授の「阿部秀助先生の學究的生涯」を參照せられたい。尙ほ此の稿を草するに當り種々忠言を賜りたる高木壽一教授に深く謝意を表す

る。

明治卅六年五月	内田博士の日本近世史を讀む(史學雜誌)	四十一年三月	本邦古代史(慶應義塾學報)
同十一月	徳川家康の商政と「メルカントル、システム」この關係を論じて彼が通商獎勵の動機に及ぶ(同)	同八月	海洋の研究(同)
卅七年一月	伊達政宗海外遣使の目的に對する吾人の疑問(同)	同九月	古代史研究の方法に就きて(歴史地理)
四十年十月	河上肇譯「新史觀」の序文	同九月及十月	人文史上に於ける都市(同)
四十一年一月	綜合經濟地理(上卷)	同十二月	十七世紀に於ける日米の關係(學報)
同二月及四月	日本地理講義(上卷)	大正元年九月、十月及十一月	日本基督教史(三田學會)
同三月、五月、八月及四十二年六月	世界經濟上に於ける門戶開放主義(國民經濟雜誌)	大正二年一月	ドーラン男著 古史 田中萃一郎譯補(紹介三田學會)
現代の史風(史學雜誌)		同一月	上總介忠輝(三田學會)
同七月		同九月	最近に於ける世界各地に於ける探險(學報)
大正三年一月		同十二月	中世に於ける資本的企業の發展を論ず(史學雜誌)
		大正元年九月、十月及十一月	幸田成友著、大鹽平八郎(紹介三田學會)
		大正二年一月	日本地理講義(下卷)
		同一月	伯林近信(三田學會)(史學雜誌)
		同九月	歐米諸國の大都市(法學志林)
		同十二月	獨逸と「バルチクアリズス(學報)
		大正元年九月、十月及十一月	史學の根本問題史學の客觀性と史料的心理的意義(史學雜誌)
		大正二年一月	近世資本主義と地代說(三田學會)
		同一月	中世企業史に於ける研究(三田學會)

- |                 |  |                        |
|-----------------|--|------------------------|
| 大正三年八月          | 野中兼山(學報)   | 近世經濟史上に於ける企業家の地位(三田學會) |
| 同十一月            | 獨逸對列強の抗爭(時事叢書第十編)  |                        |
| 大正四年五月及六月       | 元寇の研究(三田評論)  | 都市とは何ぞや(大民)            |
| 同八月             | 中世都市の典型としての「ローテンブルグ」(歴史地理)   | スマール文化の研究(史林)          |
| 同十月             | 現代の史學ミランプレヒト(同)  | 民族的國家の復活か(太陽)          |
| 同八月             | 古史の經濟史的研究(同)   | クロンウエルの植民政策(歴史と地理)     |
| 大正五年五月          | 都市の意義及成因(歴史地理)   | 徳川時代の米騒動(三田評論)         |
| 大正六年一月          | 戰後の獨逸(時事叢書、第三十一編)  | カブール(英傑傳叢書)            |
| 同一月             | 伊藤重次郎著交通論第一編(紹介、三田學會)  | オースチヤの歴史地理的研究(歴史地理)    |
| 同六月             | 戰亂と壞の中心人物(斯論)  | 藝術と經濟(文藝復興期の經濟史的研究)    |
| 同八月及十月          | 佛國人口の將來(三田學會)  | (三田學會)                 |
| 同十一月            | 我邦海港の史的研究(博多と堺)(三田學會)  | 人種的差別觀の意義(黎明會講演集)      |
| 大正七年一月          | 倫敦時代のカールマルクス(三田學會)   | 繼母根性を去れ(同)             |
| 同三月             | 子ガニズムの意義及價值(新日本)   | 大戰と民族運動の消長(太陽)         |
| 同四月、五月及六月       | 西班牙の經濟的意義(三田學會)  | 株式會社起源考(三田學會)          |
| 同五月及六月          | 元寇(大民)   | 松本芳夫著神代史研究(同)          |
| 同五月             | 池田龍藏著、稿本無盡の實際と學說(紹介<br>(三田學會))   | 史上に於ける陸主主義と海主主義(大民)    |
| 同七月             | Edward Friedmann; Der mittelalterliche<br>Welt Handel von Florenz in Seine Geograph-<br>ische Ausdehnung Mit 2 Tafeln (羅金) | フョールアベルグ問題(同)          |
| 同五月、六月、七月、八月及十月 | 田學會)   |                        |

## 宮 島 貞 亮

- 同十一月及十二月 フイヒテの經濟觀（三田學會） 同七月、八月、九月、十月、十一月、十二月  
同十二月 宗教改革の文化的價値（三田評論） 近世主本主義起源考續論（三田學會）  
同十二月及大正十年一月、二月 朝鮮文化の將來（三田評論）  
近世英國外交史論（大民）  
大正十年三月 過激派と帝國主義（同）  
同三月 近世文化生活の意義（同）  
同 スペングラー著「普魯西亞主義と社會主義」譯（日本讀書協會甲種會報第一號）  
同 中世の文化生活につきて（大民）  
同 石城志考（三田學會）  
同五月及六月 大陸封鎖令（同）  
同十一月及十二月 ハンザ對英國（同）  
大正十一年一月、三月、四月、五月及六月 大正十三年四月 日本の農家とスイスの小屋（住宅）  
同二月、五月及大正十二年十一月 社會主義に對する諸觀察（中外文化叢書）  
一九二五年一月二十七日  
近世主本主義起源考（同）  
諭訪時代の上總介忠輝（史學）